



日本で神学する

栗林輝夫セレクションⅠ

大宮有博・西原廉太「編」

神学的営みのアクチュアリテイを追究し
続けた著者の渾身の論考11編。

2015年、惜しまれつつ逝去した栗林輝夫
の選集全2巻、いよいよ刊行開始。第1巻は、
日本の文脈に現場に根ざして神学を営んだ著
者の論考を精選。解放神学者としての田中正
造論・賀川豊彦論から、ポスト・フクシマの
神学まで。実践に固執した栗林神学がここに！
下巻（現代アメリカ神学研究）は今秋予定。

◆A5判・350頁・本体3600円

■著者の本

荊冠の神学

被差別部落解放とキリスト教

現代神学の最前線

「バルト以後」の半世紀を読む

◆本体4800円

◆本体2200円

【目次より】

I 解放神学と日本

第1章 解放神学の選択・神は貧しい者を偏愛する

——マルクス主義から民衆の宗教へ

第2章 見よ、神は合中にあり

——田中正造の解放神学

第3章 マルコムXと西光万吉

——二人のマージナル・マンをめぐる

第4章 日本の解放神学者 賀川豊彦

——その神学遺産の継承をめざして

II 日本で神学する

第5章 民話・ユング・聖書

——「日本民話の神学」補論

第6章 「帝国論」におけるイエスとパウロ

第7章 日本で神学する

III 環境と技術の神学

第8章 原発と神学

——キリスト教は原発をどう考えるか

第9章 神学の視点から

——原発とテクノロジーの神学

第10章 原発と田中正造の環境／技術の神学

——人間は自然の「泰公人」

第11章 解説……西原廉太

5月25日発売

ゴッホと〈聖なるもの〉

しょうだともあき

正田倫顕著



見る者の魂を震わさずにはおかないゴッホの作品。その核にある宗教性Ⅱ〈聖なるもの〉の秘密を、書簡と作品の徹底的な分析を通して明らかにし、またゴッホとキリスト教との屈折した関係に迫った俊英の力作。カラー口絵38頁。

◆A5判・222頁・本体2700円

推薦 月本昭男氏（立教大学名誉教授・上智大学教授）

「ゴッホの「種まく人」には黄色い〈太陽〉が描き込まれている。「ラザロの復活」からはイエスの姿が消え、そこには同じ〈太陽〉が輝く。ゴッホの絵がもつこうした謎に挑む著者は、〈太陽〉をイエス・キリストに置き換えるような単純な解釈を退け、ゴッホ自身も気づいていなかったかもしれない、芸術そのものに織り込まれた深い宗教性をそこに洞察する。」

■美術の本から

竹中正夫著 **美と真実** 近代日本の美術とキリスト教

51名の美術家たちの伝記的事実を通して創作の核心に迫る。

◆本体3800円

渡辺総一著 **共に歩むキリスト** いのりの造形

信仰画家として独自の表現世界を築いてきた渡辺の聖書画52点。

◆本体1700円

●待望の新装復刊

神の和の神学へ向けて

三位一体から三問一和の神論へ

宮平望著（みやひら・のぞむ氏は西南学院大学教授）

日本から発信する神学！ 聖書が証言する神を、「問」と「和」という日本的な思考と感覚をとおして表現し告白しようと試みる、新たな神学の冒険。本書はかつて、すぐ書房から刊行されたが、版元廃業のためここに新装復刊。

◆A5判・本体2400円



高橋優子著

ポップカルチャーを哲学する

福音の文脈化に向けて『福音と世界』好評連載の単行本化。アニメやゲームにちりばめられている宗教的表象を読み解き、あたらしい福音の語り方を探求する。

◆四六判・予価2000円

ティモシー・ウエア著／松島雄一訳

正教会 東方キリスト教入門（仮題）

1963年の初版以来長く読み継がれてきた入門書の定番。2015年のペンギンブックス版第3版の待望の邦訳。

◆A5判・予価4000円

ローランド・ベイントン著／出村彰訳

宗教改革史

名著『16世紀の宗教改革』の全訳。宗教改革の原因・展開・帰結を深い史眼で平易に叙述。信教の自由や対国家観等、近代社会形成への影響にまで及ぶ。復刊への新解説を追加。

◆四六判・予価2600円

井上良雄著

キリスト者の標識

キリスト教講話集Ⅲ

『大いなる招待』『エデンからゴルゴタへ』に続く第3集。1948年「教会と文化」から64年「世との連帯性」まで12編。

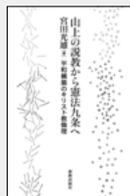
◆新書・予価1700円

●4月に出た本と雑誌

山上の説教から憲法九条へ

平和構築のキリスト教倫理

宮田光雄著



聖書釈義から説き起こし、広大な思想的考察を経て、憲法九条に基づく防衛戦略構想に及ぶ、4論文を収録。今こそ必読の書。

◆B6変・本体1800円

イースター・ブツク

改革者の言葉と木版画で読むキリストの生涯

マルティン・ルター／R・ベイントン編／中村妙子訳

キリストの受難と復活に関する説教を宗教改革史の碩学が精選。

◆B5変・本体1800円

ルター自伝

マルティン・ルター／藤田孫太郎編訳

「卓上語録」から自伝的文章を抜粋し、編訳者の詳細な解説を付す。

◆新書判・本体1200円

福音と世界

◆税込635円

5月号 特集 サクラメント——宗教改革500年⑤

寄稿者・鈴木浩、具正謨、原敬子、松島雄一、中野泰治、藤

井創／深澤契／ブレイディみかこ、高井ヘラー由紀、吉

松純、内田樹、佐藤優、芦名定道、辻学、月本昭男、望月麻生ほか

●最近、知人の音楽バンドのライブを観に行く機会がありました。わかりやすい歌詞に頼らず、ドラムやベースなどを手足のように操り聴かせるインストウルメンタルは、他のバンドにもましてひとときの存在感を放っていました。言語で伝える意味をこえて、場の空気を震わすのを震わせ、身体そのものに衝撃を与える音の力。そこには、なにか原初的な聖性・靈性に通じるものがある気がします。

●むろん、こうした力は音楽だけに限りません。たとえほかのゴッホの絵画に、ある底知れぬ力が渦巻くのを感じる人は少なくないでしょう。その根源を明らかにするのが正田倫著『ゴッホと〈聖なるもの〉』です。これによれば、ゴッホの絵画には、かれ自身の意志をも上回るものが顕現しています。「ゴッホは……〈聖なるもの〉に主語の地位を明け渡している。絵画がまさにエネルギー体となって、永遠回帰的な反復性と形成しては解体してゆく動的なさまを表現しているのではないか」。合理的な認識では捉えかねる、主客や彼我の境界線をこえたいのちのいぶきがあふれ出ているというのです。ゴッ

ホには遠く及ばずとも、こんないぶきにすこしでも触れられるようなきつかけ作りに、私も力を注いでいきたいものです。(堀)

●岩波文庫が創刊90年を迎えたそうです。岩波書店の『図書』が臨時増刊号で「私の三冊」というアンケートの回答を掲載しており、興味深い読みものになっていきます。では編集子にとって岩波文庫の三冊は何だろうと考えてみたら、すぐ次の書名が浮かびました。ブーバーの『我と汝』、ソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィチの一日』、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』。どれも学生時代に恩師から勧められたり読書会で読んだりしたものです。世界の見方が変わるほどの衝撃を受けたり、それまで考えたこともなかった終末論的な即事性と樂觀性ということを教えられたり、回心という出来事の意味を考えさせられたりと、編集子にとって非常に思い出深い本です。しかし、200名以上の回答者でこれらを挙げている方は一人もいませんでした(ちょっとさびしい)。本との出会いは、それほど個別的で異なる経験なのでしょう。(小林)

福音と世界

2017年

6

A5判・80頁・定価635円・送料70円
年間予約購読料(送料共) 8460円

特集：世界史の中で——宗教改革500年⑥

宗教改革とオスマン帝国——野々瀬浩司

聖書翻訳と印刷機——宗教改革が世界に及ぼした影響——クラウス・コシヨルケ

二人のマルティン・ルター——深井智朗

女性宗教改革者アルギユラ・フォン・ゲルムバッハの誕生——信仰と試練——伊勢田奈緒

宗教改革思想の伝播を支えたメディア環境と「福音をめぐる議論」の拡大——蝶野立彦

理性の時代の宗教改革——西川杉子

戦後史を総括し、アジアの視点に立つて今後の課題を考える……西川重則

【連載より】

- ◆ はじめての台湾キリスト教史 3……高井ヘラー由紀
- ◆ みことば散歩 6……望月麻生
- ◆ アメリカの神学と教会のいま 8……吉松 純
- ◆ 現代神学の冒険 9……芦名定道
- ◆ 新約釈義 第一テーマ書 16……辻 学
- ◆ レヴィナスの時間論 27……内田 樹
- ◆ 詩篇の思想と信仰 145……日本昭男